

虚談

リアル

ハウス

ムエン

シノビ

キイロ

クラス

ベンチ

ちくら

レシピ

275

243

209

177

145

113

079

045

005



レ
シ
ピ



僕は酒を飲まないのだけれど、居酒屋にはよく行く。

人には、相談するタイプと相談されるタイプがあると聞くが、そうなら僕は確実に後者である。知人友人からやたらと相談を受けるのである。恋の悩み仕事の悩み、人間関係のごたごたから金銭トラブル、痴話喧嘩から健康不安から業界の展望、環境問題政治問題国際問題、果てはペットの躰けや温水式洗浄便座の使い方に至るまで、もう何でもアリである。

僕は別に何でも知っているという程に博学ではないし、道を説ける程の人格者でもない。迷っているならそれぞれのオーソリティやスペシャリストの意見を聞いた方がずつとためになるのだろうし、悩んでいるならカウンセラーと面談でもした方がずつと話は早いだろう。

いいや、連中はみんな、迷ってもいないし悩んでもいないのだと思う。

もう、肚は決まっているのだ。ただほんのちょっと自信が持てずにいるだけなのである。だから誰かにほんと背中を押して貰いたい、それだけのことなのだろう。

まあ、僕なんか何を言おうと燃え盛った恋の炎が消えることもないだろうし、職場環境が改善されることもあるまい。況て、世の中がどうにかなることなどない。要するにお前の言うことは尤もだと、そう言って欲しいのだろうと思う。

でも、たいこもちよう幫間宜しく尤もだ尤もだすじ凄いい凄いい頑張れ頑張れと持ち上げるだけでは駄目なのだ。

ただ相槌あいづちを打つだけではなく、端々でそれらしいことを言って、ちょいと否定してみたり違うことを言ってみたりもして、結局それしかならうというあたりに着地するくらいが好ましいのだろうと思う。

そうはいうものの、こちらにも常にそんな展開を心掛けて人と会っている訳ではないから、いつもいつもそうなるとは限らない。

ただ、例えば確実に詐欺的行為に巻き込まれているような場合や、自滅的な選択が視野に入っているような時は、僕だって全力で否定するし説得もする。深刻な状況の場合は特にそうする。

それでも、まあ行き着く先が変わることは少ない。

要するにこちらの意見など最初からどうでもいいのである。

他人の見解はどうでもいいのだが、他人からはどうでも良くないという態度を示して欲しいのだろう。

その辺りの対応が丁度良い具合なのだと思う、僕の場合は。

まあ僕も普通の人間だから、悩みもすれば迷いもする。困ることだって多い。でも、まず他人に相談することはない。

話すのが面倒臭いからだ。面倒なプロセスを経て何某か（なにがし）のアドバイスを受けたところで、結局決めるのは自分なのだし、それが正しい選択かどうかは実行するまで判りはないのである。だから、僕が私事を第三者に相談することはない。

一方、他人の話を聞くのは嫌いではない。自分にとってはどうでもいいことであっても、とれただけだから話されても、同じ話題ばかりを繰り返されても、一向に苦にならない。そういう性質なのである。

だから相談されるのだ。

何であれ、相談する方は胸にしこりなり腹に一物なりが多少なりともある訳だから、ただの愚痴だろうが懊悩（おうのう）だろうが一杯引っ掛けた方が喋り（しゃべ）易いのだろう。

そうはいっても、聞く側がへべれけでは相談する意味がない。

そうしてみると、下戸（げこ）のくせに酒席（しやく）を厭（いと）わないという性質も手を貸している。

その場合、小洒落（こじゃれ）たバーだの、高級フレンチ店なんかは、まあ似つかわしくない。スナックだの何だの、接客してくれる人間がいるような店もいけない。相談中にお酌（しやく）されても困るだろう。お運びの店員がそこそこ素っ気なくて——つまりあんまり構（かま）われなくて、それでいて長居が出来て、更には安価なところが良いのだ。

そこで居酒屋になってしまうのである。

高校の同窓である大垣^{おおがき}からメールが来たのは、去年の秋口のことだった。

親しかった訳でもないが親しくなかった訳でもなく、まあ知り合いと友人の間くらい
の仲である。

学校を出てからも五六度しか会っていない。卒業したのが三十年以上前のことなのだから、五年か六年に一度しか会っていない計算になる。仕事上の接点もないし、プライベートでも付き合いはないから、それこそ用事もない訳で、電話やメールの遣り取りもない。年賀状を出しても返って来ないから、十年以上も前に出すのを止めている。そんな相手からいきなりメールが来たので、見た時はスパムかと思っただけである。

アドレスを教えた覚えもなかったが、誰かに聞いたのだろうか。

近々会いたいので返事をくれというような簡単な内容だった。

まあ会わない理由もないから、スケジュールさえ調整出来ればいずれ——と、そんな
感じで緩い返事を出して、その後二三度、連絡を取り合った。

実際に会ったのは十月の終わりくらいだっただろう。

場所は神楽坂^{かぐらざか}の居酒屋だった。

安くて品のない店である。

丁度その日、僕は都心に用があったのだ。しかも夕方に切り上げようと思えば切り上
げられる用件だったのである。

移動中にふと大垣のことを思い出し、メールを入れるとすぐに返事が来た。

時間と場所も指定してあった。

仕事が終わった後、個人的な用事があるということでもスタッフと別れ、一人で神楽坂に向かった。

待ち合わせだと告げて入店し、見回してみたのだけれど、どこにいるのか判らなかった。平日だった所為か席も六割程度しか埋まっておらず、混雑しているという印象はない。店員が二階でしようかなどと言うので狭い階段を昇ってみた。

二階は六卓しかなく、二卓しか埋まっていなかった。

やっぱりいい。

まだ来ていないのかと思い、戻ろうとすると奥の卓に一人で座っていた男が右手を上げた。

大垣だった。

見た目が変わっていたという訳でもないのだが、どういう訳か気付かなかった。髪形も服装も記憶の中の大垣と大差ない。暫く会っていないとはいっても、高が数年である。老けたというならお互い様だ。

「久しぶりだな。五年くらいかな」

挨拶もせず、そう言って向かいに座った。五年というのは適当で、まあそんなものだろうというだけのことである。大垣も挨拶などはせず、三年前の同窓会で会っただろうと答えた。

「いや。俺、それは出席してない」

行かなかったことだけははっきり覚えてる。

「そうだっけ。じゃあ——まあそんなものかなあ。上京してる連中で集まったのは、いつだったかな。あれはまあ、六年くらい経つと思うがなあ」

「じゃあそれだ」

別にどうでもいいことである。問題は、目の前の旧友が、殆ど^{ほとんど}変わっていないというのに何となく別人に思えるということの方だった。

大垣は、学生時代はどちらかといえば不真面目なタイプで、宜しくないことも沢山^{たくさん}仕出かしていた。かといって不良という訳でもない。今と違って昔の不良は、それはもう確りとコード化されていたのである。コスチュームから一挙手一投足、言葉遣いまでが画一化されていたのだ。だが大垣はそうではなかった。丁度校内暴力なんかが問題視されていた時期でもあったから、まあ暴れる奴らは暴れていたのだが、大垣はそういうこともしなかった。

少し前の言葉でいうなら、チャライ男というのが一番びったり来る。

僕の方も、まあ腕力も度胸もなかったからそういう強面^{こわもて}のグレ方は出来なくて、でも良い子ぶるのも柄ではなくてという微妙な立ち位置だった。

優等生でも劣等生でもない、単に変わった生徒というのが一般的な評価だっただろうと思う。

僕は概ね隅の方から斜に構えて眺めているだけの傍観者であり、大垣はいつも真ん中辺りでちやらちやらと戯けている道化者だった。とはいえ、卒業してしまえばクラス内の立ち位置なんかは関係なくなる。人生も半ばを過ぎれば互いにただの中年である。中年二人はあれこれ注文して、先ずは乾杯した。

「お前さ、キヨミ覚えてるだろ」

大垣は唐突にそう言った。

「キヨミ？」

一瞬、人名とは思わず、僕は妙な顔をしてしまった。

「何だよその顔。清美。須田清美」

「ああ」

思い出した。いつもちょっと困ったような顔をした、気の弱そうな女子だ。
慥か――。

「酒屋の娘じゃなかったか？ ええと、三丁目のリカーショップ須田」

「それ」

「火事になったよな」

なったよと大垣は暗い声で言った。

「で？」

「で、って。覚えてないのか？ お前何でも覚えてるだろ」

「何を。あれは慥か——卒業式の前くらいのことだったと思うが、凄いい火事だった記憶があるが」

取り敢えず火事はいいんだと大垣は言った。

「いいのか？」

「良くはないけど、いや——全然良くないんだが、まあ、そこじゃなくてさ。俺達付き合ってただろ？」

「ハ？」

そうだったと言った。

「俺の記憶だと——お前さ、大垣。一年の時、まず浅田と付き合っただろ」

「四箇月くらいな」

「いや、それから——二組の吉川に惚れて、その後下級生の小野寺だったけ？」

「小野寺志之な。あいつ、十五年くらい前に子供置いて失踪したそうだな」

「そうなのか。それから木村に手を出してすぐ別れて、山下に告白して振られて、次に新島に——」

「おい」

「何だ。間違っているか」

「間違っていないけどな。それよりお前、何でそんな俺の恋愛遍歴を詳細に覚えてるんだよ。それ以前に何で知ってるんだよ」

「いや、まあ有名だったからな」

そう言うとき大垣は眉間に皺を寄せた。

「三十年以上も経ってのに細かいこと覚えてるんじゃないやねえよ。とんだけ記憶力イイんだよ。タチの悪い男だな。でもな、そこまで知ってて何でキヨミと付き合ってたことだけ知らないんだよ。そこが解んないよ」

「まあなあ」

記憶力は悪くはない。ただ、知らないものは知らない。そもそも浮いた話には興味がなかったから、自分で探ったり聞き出したりした覚えはない。聞こえて来る話を記憶していただけである。

「それは聞こえて来なかった」

「そうなのか。キヨミはな、俺の高校時代最後のカノジョだよ」

「まあ、須田さんはどちらかというと地味で目立たない方だったが、実は整った顔立ちの美形ではあったからな。俺はクラス全員の似顔絵とか描かされたから、そこところは知っている」

「そうなんだ。実はかなり可愛かったんだよ。俺もさ、結構本気で、卒業しても別れる気はなくてな。向こうもそうだった。というか、イイ感じだった。丁度、今くらいの季節かな。十月だったと思うけど」

「何がだ」

「付き合い始めだよ。偶々^{なまじ}帰りが一緒になってだな。家はキヨミン^{うら}家の裏手で、方角一緒だったから」

「そうだったかなあ」

郷里には殆ど帰っていない。地理的な位置関係は既に脳内^{すで}で恣意的^{しい}に歪め^{ゆが}られているから、そういう意味では甚だ^{はなは}不正確である。

「まあ俺はその頃フリーでな」

「ちょっと待てよ。ええと、お前は三組の大道寺^{だいどうじ}と——じゃあ別れてたんだな？」

「大道寺？ あ、寛子^{ひろこ}か。そうそう。あれは堅い女^{かた}でな。色々ダメだった。それにしてもお前、そんなの俺本人が忘れてたぞ。寛子とは半月も付き合わなかったからな。自然消滅だった。思い出した」

「俺の知る範囲では、高校時代のお前の彼女は大道寺で打ち止めた。その後のことは知らん」

「卒業後のことまで知られてたんじゃ怖いだろうよ。お前NSAか何かか。いや俺はだから、寛子とダメになって、それでちょっと沈んでたんだよ。珍しく。で、キヨミと」

「デキたのか。まあ若かったとはいえ節操がないと思うよ。俺は」

「高校三年間で浮いた話一つもなかったお前の方が異常だと俺は思うよ。で、まあ言い悪い話だが、二三回デートして、行くところまで行ってしまった訳だ。キヨミは、まあ男と付き合った経験もなくでだな」

「あのなあ。わざわざ呼び出して六年ぶりに会って、それで三十年前の惚気話か？」

「いいから聞けよ。語りづらいこと語ってんだから。まあ、だから色々初めてで、俺も何だか可愛くなってなあ。かなり真剣になったんだよ。で、クリスマスにな、お菓子かなんか作ってくれてな。その、芋の」

「焼き芋か」

「違えよ。何てえの、俺作り方とか知らないけど、あの潰して焼くのかな」

「スイートポテトか？」

それだよ、と言った大垣の顔は、どこことなく蒼褪めていた。

「それが美味かったんだ。第三公園のベンチで喰ったんだが、まだ温かくてな。喰い終わったら雪がちらちら降って来てだな、それで、俺は安物のブローチかなんかプレゼントしてよ。で、手編みのマフラー貰った」

「あの白いマフラーか」

「覚えてるのか」

映像記憶は割に鮮明だ。大垣は卒業近くまでそのマフラーをしていたと思う。

「まあ、何というか、ラブラブというかな」

「おっさんが口にする言葉じゃないだろ」

「当時は若者だ馬鹿。本気だったんだよ。それまでチャラかったからな」

自覚はあったようである。

「俺はさ、そのスイートポテトがあんまり美味かったから、また作ってくれと言ったんだな。何か作り方にコツがあるんだとかいう話でさ。茹^ゆでないで蒸^ふかすんだとか、ブランデーの量がどうか、牛乳は使わないんだとか——そんなこと言ってた。聞いたって判らないから、ただ美味い美味い言っただけだな。そしたら誕生日にまた作るって言ってくれてな。笑うと可愛いんだよ。キヨミ」

大垣は遠くを見るような眼をした。

「で、まあ俺の誕生日が三月十日で、楽しみにしてたんだよ。年末年始って、微妙に親の目とかあって会にくいからな。二日に映画に行ったけどな」

「スカラ座だろ。田舎^{いなか}の名画座だからろくなもんはかかってなかった筈^{はず}だ。ロードショーじゃないな。その年の正月は慥^{たしか}か——そう、『ファンタズム』と『さよなら銀河鉄道999』の併映という無茶苦茶な組み合わせだったと思うぞ。こういうセンスで選んだのかな」

呆^{あき}れた男だなあと大垣は言った。

「完全に忘れてたが、多分合ってるよ。覚えてるわ、アニメ。で、まあ、そこまでは良かったんだよな。それでバレンタインかなんかがあって、チョコ貰^{もら}ったりしてな。でもなあ、俺、大学こっちだったろ？ 寮^{せう}だったんだよ。で、入寮の手続きとか準備で一度上京しなくちゃいけなくなってるさあ。それがな、丁度三月頭でな」

「ああ。もしや誕生日に被^{かぶ}ったか」

「ばっちり被ってたんだな。ま、東京行かなきゃいけないってことは知ってたんだけども、実は俺、大学生活にそんなに興味なくて、日取りなんかはいい加減でさ、親に言われて、あっと思ったのが出発三日前だ。キヨミはキヨミで仙台せんたの専門学校決まってたんだが、その時丁度、やっぱり手続きか何かで休んでた訳だ」

「高校三年生は忙しいからな」

「忙しいのよ。携帯電話なんか無い時代だろ。連絡もつかない訳。キヨミはな、仙台行く前に、帰ったら卓哉たくや君の誕生日だから、お菓子——スイートポテトか。それ作るねって言ってるよ。でもだな、キヨミと入れ違いで俺は東京な訳さ。それが、伝えられない訳よ」

「須田さん、怒ったか」

怒らないよと大垣は言った。

「俺は、まあ十日には戻る予定にはなってたんだが、着くのは夜遅くだったからな。そりゃもう気が気じゃない訳だよ。で、キヨミはキヨミで、誕生日には戻ると誰かから聞いたらしくてな。作ってたんだよな。スイートポテト。十日は日曜日だったから、必ず連絡はあるだろうと思ったんだろ。でもよ」

「何だよ」

火事だよと大垣は言った。

「そうか。火事か——あれはそのタイミングなのか」

「戻ったらもう大騒ぎさ。というか、空港に迎えに来ないんだよ。親。電話も通じないし。自力で帰ったら焼けてた。全焼が三軒、半焼が五軒。大火事だよ」

「須田さんは——」

「判らなかった。酒屋は全焼で、俺の家も半焼だ。もう何が何だかだ。取り敢えず警察に事情を話して、親のいる病院に着いたのが深夜の二時くらいでな。親と話せたのも暫く後のことよ。キヨミも入院してる筈だと言うんだが、同じ病院じゃなかったらしくってよ」

「あそこ、大きい病院がないからな。街の方の総合病院に搬送されたんじゃないのか」
 そうだったんだろう、と大垣は言った。

「だろうって何だよ」

「俺、結局会えなかったんだよ」

「会えなかった？」

「キヨミがどうなったのかも判らなかった」

「死んで——ないだろ？　そういえば卒業式には出てなかった気がするが、亡くなったというアナウンスはなかったぞ。担任は火事で大変だという話はしてたけども」

ご両親は亡くなったんだと大垣は言った。

「連絡のしようがない。担任にも言ったが、卒業式は」

「十八日だった」

「そう。たった一週間だよ。俺もさ、家の後始末とかあったし、親のこともあるし、先ず住むところがないからな。ドタバタしてるうちにもう卒業式で、俺、加藤かとうの家に厄介になつてただけどなあ、卒業しちまえばそれまでだろう。親戚しんせきのおじさんが来て、何やかやでな。大学も止よそうかと思つたんだが、そりゃ駄目だと言われてさ。学費も払い込んでるし、何とかなるから行けと言われちまって。でも俺、内心それどころじゃなくてさあ。キヨミに会いたい訳。で、病院突き止めて行つたんだけどな」

「どう——した」

転院してたと大垣は言つた。

「転院？ 相当酷ひどかったのか？」

「いや、火傷やけどなんかはしてなくて、ただ何だ、一酸化炭素中毒しんそくつてのか？ それだつたようだ。でも意識も戻つて、回復に向かつてたらしいが、入院費用の問題でいられなくなつたみたいだつた」

「ご両親も亡くなつてるんじゃないかあ」

というか、こいつも色々あつたんだなと思う。

三十年以上も、何も知らずに付き合つていた。

「転院先も聞いたけど、行けなかつたよ。何たつて俺自身が焼け出された高校生だつた訳だから、自由にはならないんだよな。病院に電話してみたけど、取り次いでは貰えなくて、伝言頼たのみだけど、どうなつたか判らん。で、俺は大学の寮に入っちゃつた」

それきりなのかと尋くと、それきりなんだと答えられた。

「半年くらいはなあ、気にしてただけども、俺ほら、こんな性格だからさ。チャライ訳。キヨミのことは本気で好きだったけどね、どうしようもないのさ。連絡先が判らないんだし。でもって普通に学生やってりゃ浮いた話もあるだろ？ お前みたいな朴念仁^{ぼくねんじん}は知らないけどよ。まあモテリヤモテただけ増長するしな。カノジヨっぱい娘とも出来てよ。でもちゃんと交際とかはしなかった。やつぱり気になってた訳だよ」

それも一年くらいだったかなあ、と大垣は言った。

半焼になった実家は借家だったらしく、結局取り壊されてしまったのだそうだ。大垣の両親は何処かに移り住んだということなのだろう。推測するに大垣はその所為で郷里との縁も切れてしまい、須田清美の行方を追う術^{すべ}もなくなってしまうらしい。

大学二年になって、大垣は同じゼミの娘と交際を始めたという。

本人の談に依れば、言い寄られたのだそうだ。

その子は茨城出身の家庭的な娘で、アパートで一人暮らしをしていたらしい。大垣は寮を抜け出して、能く彼女の家に泊まったという。

「一年くらいは続いたかな。由香利^{ゆかり}って名前だった。料理とかしてくれて、まあパスタとか、美味かった。それがな、突然別れてくれと言われた」

「浮気でもしたか」

「しない。オレはチャラかっただけで、そんなにモテた訳じゃない」

田舎のイケメンも都会じゃ十人並みかと言うと、イケてなかったんだ田舎でもと大垣は応えた。

「チャラかったただけなんだ。だから、まあ浮気なんかしないよ。だから理由がない。訳が判らなかつた。別れのセリフがな、コナッツって何、だった」

「意味が解らないよ」

「俺も判らなかつた。でも、何か頑なでな。もう何を言っても別れて欲しいの一点張りでな。釈然とはしなかつたが、別れたよ。それで暫く、俺のモテ期は終了してさ。残りのキャンパスライフは、女気のない侘びしいものだったぞ。慥か最初の同窓会があっただろ。その頃の俺は、だからモテない苦学生だった訳だよ。金もなかつたからな」

卒業後、大垣は中ぐらいの規模の設計事務所に就職したのだという。

就職して二年目に、大垣は経理の女子職員と恋仲になった。

「結婚を考えた。まあそういう年齢だろ。俺、チャライのは卒業してたからな。慥かその頃一度会わなかつたか？」

「会った。清水の結婚式だ。こっちでやったんだよ。お前、そういえば結婚式って金掛かるよなあとか言ってたっけな。俺は祝儀の話かと思っていたが、そうじゃなかつたのか、もしや」

「ホントにつまらないことは覚えてるな。まあ、その頃俺がそう言ったなら、間違いない自分の挙式のことを念頭においた発言だよ。結婚する気でいたものさ」

「しなかったな」

お前に先を越されるとは思ってもみなかったがなあと大垣は言う。

「また別れてくれと言われた。理由は尋くなく言う。納得出来ないさ。何度尋いても何と言わない。でもなあ、前のこともあるからよ、どうしても理由が知りたかった。俺が気づいてないだけで、自分に重大な欠陥があるのかもしれないからな。そしたらな」

あの女は誰——。

「あの人？」

「判らなかった。俺はさ、その頃全然浮ついてなかったし、仕事も忙しくてな。彼女以外に口を利く女なんか、総務のオバさんくらいのもだったから、浮気だの二股^{ふたまた}だのあり得なかったんだって。大体、彼女はもう俺のマンションに半分棲^すんでさあ、半同棲^{どうせい}状態だったんだから。まあ身に覚えもないし、激しく言い訳したさ。そしたらな、彼女も激昂^{げきおう}して」

いつも台所にいる女よ——。

「台所？」

「誰もいねえさ。俺はその頃、小振りの賃貸マンションだ。1Kだぞ。結婚したら引越そうと思って部屋探してたくらいで、誰かがいる訳ないのさ」

「いつも、というのが解らないが」

「俺も解らなかった。そしたらな」

何が違うのよ、もう我慢出来ない——。

「それが捨て台詞^{ゼリフ}だった。彼女、事務所も辞めて郷里^{ふるおか}の福岡に帰っちまった」

「益々^{ますます}解らないな。お前ホントに心当たりなかったのか」

「ない。というか——その時はないと思った」

「その口振りだとあった、ということか？」

判らないと大垣は言った。

「だから相談している」

「お前に判らんものが俺に判るか。そもそも、その話だって既に二十年以上も前のことじゃないのか？ そんな昔の痴話喧嘩の理由が、俺に判る訳がないだろう。俺はNSAじゃないよ」

もう少し聞いてくれと大垣は言った。

その後、大垣は緩い女性不信になって、数年は仕事に打ち込んだのだそうである。その甲斐^{かい}あってか、三十路^{みそじ}を前にして大垣はヘッドハンティングされたのだという。声を掛けて来たのは中堅の建設会社で、バブルが崩壊して勤め先の事務所も左前になっていた頃だったから、大垣は喜んで転職したそうである。

「もう結婚とかは考えてなくてな。でも、まあ多少の女出入りはあったが、別にどうでもなかった。だからもういいのかと思った」

「いいのか——って？」

「ああ」

「何がいいんだ？」

「俺な、その福岡の女と別れた後に思ったんだよ。もしかしたら」

キヨミじゃないのかって。

「あ？」

「死んでたんだ。キヨミ。女が出てった後に突然悪い予感がしてさ、ちょっと親に尋いてみたんだよ」

「尋いたって——何を」

「だから一緒に焼け出された酒屋の娘の消息をさ。そしたらな、知ってたよ。意識は戻ったものの後遺症みたいなのが残って、身寄りもなくて、働くことも出来なくて、火事の——翌々年に死んだって」

「おい。それ——自殺ってことか」

大垣は頷いた。
うなず

「ドアノブに紐掛けて座ったまま首吊ったんだそうだ。死んでたんだよ。俺の誕生日にスイートポテト作って、渡せないまま火事に遭って、それで生き残ったのに会うことも出来ず、そのまま——死んじまってた」

「そうなのか」

僕は複雑な心境になった。

この齢になると、まあ同級生も結構亡くなっている。多くは病気や事故だが、偶に自殺の報せも受ける。自死する理由は様々だけれど、まあ人生に草臥れたような、そんな話ばかりを耳にする。馬鹿だと思う。失敗したって死ぬことはないだろうと思うのだ。生きて行けないから死ぬというのはおかしい。本当に生きて行けなくなって死んでしまったというならこれは不幸としか言いようがないが、その末路を予測し、先んじて死ぬことはないだろう。ほっておいても遠からず死ぬというのなら、それまでは生きていればいいのだ。

でも、須田さんは。

三十年以上前に死んでいた。

「お前、まさか」

「いや——俺を怨んでるような気がしてな。丁度、大学時代の彼女が出て行く直前くらいに死んでるんだよキヨミ。で、もしかしたら台所にいた女って」

「いやいや。だってな、そんな、幽霊だったらその、九州の彼女もそう言うだろう？」

「佳奈子——佳奈子っていう名前の女だったんだが、佳奈子は台所にいつもいる女、と言ったんだよ。いいか、いつも、だぞ。それ生きた人間じゃねえよ。誰かがいたのだとしても、普通、いつも台所になんかないだろうよ。そう考えないと——いやそう考えると辻褄が合うだろう」

「いや、辻褄というかな、大垣。それは——」